

道ばたに見る夏・秋の草たち 市街地の生きもの 広瀬重夫

キクのなかまの夏草



キクのなかまは維管束植物（いかんそく植物）の中では最も種類が多く、約2万種と言われます。2, 3の夏草を通してその素顔にふれましょう。



写真244、ハキダメギク
6月、神仙寺通1



写真245、ブタクサ
神仙寺通2

■ハキダメギク

漢字で書けば「掃き溜菊」でしょうか。花は小さいですがまわりに白の舌状花、中は黄色の筒状花からできていて、春のページで説明があったように、多くのキク科のなかまの特徴を備えています。熱帯アメリカ原産の帰化植物で、畑の雑草として広がっています（写真244）。

■ブタクサ

北米原産で、明治の中頃に関東地方で知られるようになり、いまや全国に広がっている帰化植物です（写真245）。

細長く立てた穂状のものは雄花だけの集合で、その一番下に苞葉（ほうよう）に囲まれた2つ3つが雌花です。

キク科の多くのなかまが虫媒花なのに、このブタクサは風媒花で、北米では花粉症をおこす植物とされます。似たものにやはり同じ外来種のオオブタクサ（葉がクワに似る）がありますが少数派です。

なお、よく似た名前のブタナ（キク科）がありますが、これは春咲きで、花はタンポポ型で美しい。



写真 2 4 6、ヒメムカシヨモギの群落
8 月、小野浜町



写真 2 4 7、ヒメムカシヨモギ（左）とオオアレチノギク
（右）
9 月、須磨寺 1

■ ヒメムカシヨモギの群落

震災後の空き地などで大いに広がっているのは、北米産のヒメムカシヨモギです（写真 2 4 6）。ほっそりして背高く、ぎっしりと生えています。このヒメムカシヨモギは大群落をつくりやすい植物のひとつです。まれに茎の上の方に小枝をたくさん出しているように見えるのが、オオアレチノギクです。

■ ヒメムカシヨモギとオオアレチノギク

ヒメムカシヨモギには白い舌状花が見られます。一つ一つの花（頭状花）がヒメムカシヨモギよりも大きく、舌状花が見えないほうがオオアレチノギクです。2 つ並べて比べてみると違いが分かりやすいです（写真 2 4 7）。



写真 2 4 8、アレチノギク
2 月、青谷町 2



写真 2 4 9、オオアレチノギク
1 0 月、狩口台 3



写真 2 5 0、ヒメムカシヨモギ
2 月、琴緒町 1

■ アレチノギク

春のページで紹介しましたが、比較のため、もう一度取り上げます。

細長い葉に、まばらに切れ込みがあります（写真 2 4 8 ）。

■ オオアレチノギク

葉の先の方が幅広くなっています。こういう葉の形を倒披針形（とうひしんけい）といいます（写真 2 4 9 ）。[倒]は「あたまでっかち」という意味です。

■ ヒメムカシヨモギ

葉の柄が長くて、卵形の葉は紫色がかっていることが多いようです（写真 2 5 0 ）。

上の 3 つは互いによく似ていますので、目印をしておいて追跡（ついせき）し、のちの様子を観察します。

春や夏にそなえて、冬の植物調べも楽しみのひとつです。

[このページのPDFファイル](#)



[トップページへもどる](#)